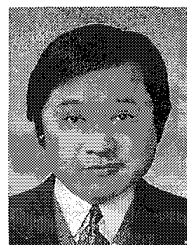


## 新任教員紹介



史学科助教授

時 枝

務

立正大学を卒業して早くも四半世紀以上たつ。その間、一貫して考古学の方法で宗教史を描こうと努力してきたが、いまだ十分な成果をあげるまでに至っていない。

卒業論文で扱ったテーマが修験道で、当時ようやく学問の対象として注目されはじめたばかりの怪しい宗教を取り上げたが、はたして考古学の方法でどこまで研究できるかさえ覚束ない状態であった。

卒業論文の論題を考古学の主任教授でいらした坂詰秀一先生に相談に行った際、たまたま非常勤講師で来られていた石村喜英先生が研究室におられ、お二人の先生が口を揃えて石田茂作先生が聞いたらさぞ喜ばれるいい課題だからぜひおやりなさいと勧められ、その気になって「修験道文化史研究序説」という文字通りの序説を提出

したのであった。お三方とも仏教考古学の権威であることはいままでもない。

今振り返れば、あの程度のものでよく卒業させてもらえたものであると汗顔の至りであるが、テーマが変わっていたことだけは確かである。希少価値を認めてもらえたのにちがいない。

その後、山々の遺跡を踏査し、山で採集された遺物を見てまわり、懲りもせずに修士論文も卒論の延長線上で仕上げた。

しかし、考古資料だけで山岳宗教の実態を知ることとは難しく、里修験の家に伝わる古文書を調べ、かつて修験者が活動した地域で民俗の聞き書きをおこなったこともあった。先代まで修験者だった家で、長時間にわたって修験道について教えてもらい、挙句の果ては食事までご馳走になるという厚かましさを調査できたのも若さゆえと今では思う。

大学院では、石田茂作先生の高弟である三宅敏之先生から経塚研究の基礎を教えていただき、その頃先生が中心になって進めていた科学研究費助成金を使つての大規

模な和歌山県那智経塚出土品の調査に同行させていただく機会を得た。那智大社や青岸渡寺に所蔵されている重要文化財指定の遺物を手にとって観察できたのはまったくもって僥倖であった。

数年後、その機縁で東京国立博物館に奉職し、日常的に実物に接することができたおかげで、考古資料をみる眼が養われた。

もっとも、博物館は思いのほか忙しく、展示や貸与、カタログ執筆やギャラリートークなどに追いまくられ、腰をすえて研究する時間などまったくなかった。まして独立行政法人化し、民営化の可能性が模索されるようになってからは、経済効率の尺度にあわない調査・研究が切り捨てられるのは当然のなりゆきであった。

そんな厳しい時間の隙間を縫って書き上げたのが『修験道の考古学的研究』で、卒論以来のテーマにようやく一区切りついたが、わからないことばかり多く、成果どころか逆に今後の研究課題が山積みしたというのが実情である。

それにしても、先生方に恵まれ、実物の考古資料に接

する職業に長年従事できたおかげで、それなりの研究ができたのは幸運であった。

今後は、これまで蓄積した調査資料をもとに、宗教考古学の確立にむけて歩み始めようと考えている。修験道や仏教だけでなく、神道やキリスト教など、さまざまな宗教に関わる考古資料の個別研究をおこなうとともに、宗教考古学の方法論の練磨に努めたいと思う。